



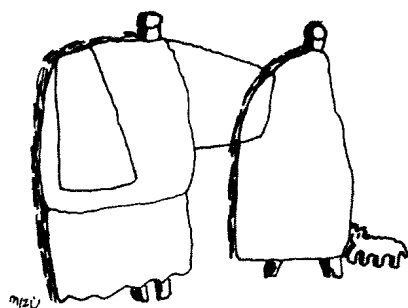
灰谷健次郎

少女の器

新潮社

少女の器

灰谷健次郎



新潮社

少女の器

一九八九年三月一〇日 発行
一九八九年五月二五日 四刷

著 者 灰谷健次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 鐵新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 東京03(三六)五二二

編集部 東京03(三六)五二二
振替 東京四一八〇八番

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 加藤製本株式会社

● 乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小
社通信係宛お送り下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。
● 価格はカバーに表示してあります。

© Kenjiro Haitani 1989, Printed in Japan

ISBN4-10-338404-2 C0093

少女の器

第一章

飼い猫のチャプが家を出てから三日になる。

「ペルシャはシャムより情が薄いからねえ」

と、峰子がいったので、また、口げんかになった。

「シャム猫よりペルシャ猫の方がノーブルだなんていったのはだれなのよう。そうやっていつだって無責任なんだから」

ちよつと、あごを突き出すようにして、中学三年のひとり娘の^{かすり}緋はいった。

「関係のないことをいって、ひっかかってくるんだからたまらない。やりにくくなつたねえ、この子」

峰子はちよつと他人の目つきになつて娘を見た。

ふん、と緋はいった。

「チャプもあんたも思春期で反抗期だつてことぐらいはわきまえているつもりだけど、あんたの場合はしつこいのよね」

「いやらしいことをいわないでよ。いやだナ」

と、緋はおおげさに顔をしかめて見せた。

「なーんにもわかってないんだから」

「そりゃ親子だって別々の人間なんだから、わからないことだってあるでしょうよ」

「そんなことじゃないの」

紺は大きな声で腹立たしそうにいった。

「思春期だの反抗期だのそんなことばを使ってわたしたちを見る大人ってつまりは怠け者なんだ。そのことがわかってないから、なーんもわかってないといったのよ」

「それ、どういう意味？」

「人間っていろいろでしょ……」

「そんなことあなたにいわれなくてもわかってるわよ」

「思春期だ反抗期だといわれている子もいろいろいるんだから。同じ人間なんてひとりもないのよ」

「それがどうしたっていうの」

「鈍いんだからもおう」

紺は駄々っ子のようにいった。

「なにか自分の手に負えないことがあると、思春期だからねとか反抗期だからねといつとけば、そのいろいろの部分を考えなくてもいいから楽じゃない。つまり怠け者っていうことよ。解説つけないきゃわかんないんだから嫌になっちゃう」

なるほど、そうですかと、峰子は半分感心したような半分呆れたような顔をした。

「あなたに満足してもらような生き方をしようと思えば、人生疲れてしまうわ」

「トースト取って」

絢は乱暴にいった。

「自分で取りなさいよ」

「いつもはかばいたがるくせに……。気まぐれなんだから……」

小憎らしく絢はいった。

「親子ってどうしようもないね」

「そうよ。親子ってどうしようもないのよ」

こんどは屈託のない調子になって絢はいう。

その時分になって邦夫はやつと読んでいた新聞を置いた。

「あなたってずるいのね。少しは中に入ってくれたっていいじゃないの」

峰子はそれをちよつと甘えた調子でいった。すぐ、しまったと思った。あんのじよう絢の声がとんできた。

「いやねえ」

「なにが」

峰子はしらばつくれた。

「甘えてるんでしょ」

「なにいつてんの」

峰子は乱暴に、トーストにバターをぬりたくった。

「ほらほら動揺しちゃって……」

さすがに峰子はかっとなる。

邦夫が目で制した。

「絢ちゃん」

「なに」

「こんどの日曜日あいてる？」

「あいてるけど、なに」

「ヨットの古いのを買う話してんだ。日曜日に現物見に行く約束をしてんだけど……」

絢はみなまでいわせず

「行く、行く」

と、はずんだ声でいった。

「クニオサン。絢を甘やかさないでください」

峰子はこちらは本気でいった。

「この子、生さぬ仲につけこんでいるようなところがあるんだから」

「生さぬ仲ってなによ」

と絢はきいた。

「ママ親とママ子。そんなことも知らないの。一人前の口をたたくせに……」

つつけんどんに峰子はこたえた。

いやあねえと絢は、さも軽蔑したようにいった。

「ママに教えてもらっている学生さんは気の毒だわ」

「それ、どういう意味？」

「ここで学生さんと議論しているとき、そんな下品なこといわないじゃない」

「ママ親とママ子といったのがなぜ、下品なの」

「へえ。下品じゃないの。まま子だなんて。それに、口をたたくだなんて。そんないい方」
ふうと峰子は溜息をついた。それから、手強い相手を見るような目つきになって緋を見た。

「それにいつときますけどねえ」

緋は峰子の視線をはねかえしていった。

「わたし、自分から好きこのんでまま子になったんじゃないやありませんからね」

邦夫が口をはさんだ。

「緋ちゃん。それはいつてはいけないことだよ」

あらつと緋はびつくりしたような顔をつくつて見せて、それから

「ごめん。ごめんなさい」

と、どちらへともなくいった。

「緋ちゃんのそういうところが好きだなア」

野暮ったく邦夫は緋をほめた。

「そこまでいうことはないの」

峰子はちよつとうらめしい顔つきになっている。

大人の顔と子どもの顔をいっしゅんに使い分けるそんな緋にまいてゐるらしい邦夫の甘さが、

峰子は気に入らない。

「あなた、どうでもいいけど学校へ行く準備をしたらどうなの」

緋は返事をしないで席を立った。

峰子の後ろにまわり、指で峰子の頭をさして何重も丸をかいた。最後に五本の指をぱつと広げて見せながら緋は邦夫にウィンクした。

仕方なくといった感じで邦夫は笑った。

上階^{うへ}に上がってから縋はなかなか降りてこなかった。

もうどうしようもない子ねと、峰子は口の中でぶつぶついつて

「縋！」

と上階に向って大声を出した。

縋は男とたそがれの公園を歩いていた。

「うーん。どうかな」

男はちよつと困つていった。

「ママはクニオサンって呼べばいいっていうの。無理にパパなんて呼ぶのは気味が悪いって」

「ママのいいそうなことだね」

「ママって背伸びしてるでしょ。突っ張ってるというか」

えつと男はびっくりして縋を見た。

「嫌なんだ。そういうとこ」

ふーんと男はしげしげといったあんばいで縋を見た。

「そりゃ、パパなんて呼ぶの、はじめは抵抗あると思うけど、そんなの寒いときに思いきつてズールに飛び込むようなもんでしょ。すぐ、なれちゃうじゃない。あの人、わたしを嫌ってないと思うわ」

「そりゃそうだろうさ」

「自信たっぷり？」

「おれの子だからなんていわないけどね」

フフフと緋は笑った。

「わたしに嫌われたら困るって感じよ。可愛いじゃない」

なにいつてんだおまえ、と男は緋の額をこつんと突いた。

「まえにママがいったこと覚えてる？ 女は可愛さを売り物にしちゃいけないって。そのとき、パパはどういったと思う」

「さあ」

「覚えてない？」

「覚えてないね」

「それはそうだけど、ひらき直ってそういわれると男は鼻白むねって」

ハハハと笑って男はいった。

「思い出したよ。おまえそのとき、勝手に可愛いのならいいじゃないって、ママに逆らっていたね」

勝手に可愛いのならいいじゃない、か……と男はもう一度口の中でいって、おかしそうに笑った。

「わたしは可愛いって思うとき、その人が好きになるわ」

「うん。自然でいいね。それにそういつてもらうと、男は気が楽になるね」

ふーんそんなもんかナと緋はこましゃくれていった。

「どうしてママは可愛気がないのかナ」

男はきこえないふりをした。

「ね、どうしてだと思う」

「なにが」

「ママは可愛気がないということ」

「縋はしつこくたずねた。」

「おまえには可愛気がなくても、ほかの人、たとえば畑中さんにとっては可愛いと映るかも知れないじゃないか」

「クニオサンね。そうかア。そうねえ」

「縋は少し考えた。」

「だけれどね、パパ。ママはクニオサンに甘えるときがあるけど……」

ふと気がついて縋はあわてていった。

「ごめん、ごめん。パパに悪いナ、こんなこといつちゃあ」

「いいよ、今さら」

男は苦笑いした。

「それでどうなんだい」

「うーん。いいたかったことというのは、クニオサンはママに甘えたりなんかしないってことと」

「そりゃ男なんだから」

「そういう意味じゃないの。つまり……、なんていったらいいかな……」

じれったそうに縋はいった。

「クニオサンはママがとっても可愛いつていう感じじゃないの。ママはそういうふうに扱っても」

らいたそうだけどさ」

かなわれないなあと男はつぶやいた。ききとがめて、どうしてもと緋はたずねた。

「どうしてって、おまえ。娘にそんなふうに見察されてはやりにくくてしょうがないじゃないか」

「そう？　そうかなア」

緋は軽い調子でいった。

「ママだってわたしのことすつごく批判するじゃない」

「よく批判はするね。あの人」

「でしょう」

勢いこんで緋はいった。

ちよつとまづいなと男は思った。

「おいおい。話をもとへもどせよ」

「なんだったつけ」

緋はいたずらっぽく、少し顔を横に傾けていった。

「畑中さんをどう呼ぶかってことだろう」

「あ、そうか」

フフフと笑って緋は男の腕をとった。

「もうどうでもいい。そんなこと」

緋はそういつて自分の頬を男の腕にこすりつけた。

男はからかっていった。

「緋に恋人ができれば、やっぱりこんなふうにするかい」

「あつたりまえでしょ」

緋はどーんと男の背をたたいた。

「パパはちつとも緋に家にきてくれっていわないね」

「不満かい」

「少し、ね」

緋は甘えていった。

「じゃくるか。ママとの約束で緋はどう行動したっていいことになってんだ」

「知ってる」

「緋にきくけれど、緋はパパの家にどうしてこないんだい」

男は笑いながらたずねた。

「そ、れ、は、ねえー」

男はからかうように、そ、れ、は、ねえと緋のことばの上に、自分のことばをかぶせた。

「ばかア、知ってるくせに」

緋はばちーんと男の背をぶった。

どこからか鎖を引きずったスピッツが駆けてきて、ふたりにじやれた。

緋はしゃがみこんでスピッツを抱き上げながら男にいった。

「だけどさ、ママはもうしつかりしているからさ。これからはパパの家へも泊りにいく」

「緋ちゃん。ここんとこ読んでごらん」

邦夫はそういつて緋に週刊誌を突き出した。

受けとって、しばらく活字を追っていた緋は

「ふーん」

といつて少し唇を曲げた。

「なに」

峰子がたずねた。

「夫婦でいなくなった猫をさがしているんだって。すごいんだよ。新聞に折り込み広告はするし、電柱に貼り紙するし、ポスターは作るし……」

「どういう人、その人」

「どういう人ってそういう人なのよ。奥さんはねえ。一晩中、独りぼっちで車の中で猫を待っていたんだって」

「どういう人なの」

峰子はまたいつた。

「猫のことを思つて涙をポロポロこぼしていたんだって」

「ばかみたい」

「ばかみたいっていいですけどね。ちょっとくらいなら、緋、賛成しますね。ママにはわからない心境」

「なにいつてんの。あなたもけっこうその人ばかりしてんじゃないの」

「そういうこといわないの。いやだなあママは」

緋は露骨に顔をしかめてみせた。

「また、はじまりましたか」

ひやかして邦夫がいった。

絢はとつぜん邦夫にたずねた。

「ママ、可愛い？」

いっしゅん邦夫は詰まった。あいまいな笑顔になった。峰子は少しきつい表情になる。

あわてたように絢はいった。

「口げんかをしているときって、ふたりとも可愛くないでしょ。つまらないことをきいちゃった」

そんなことないよと、邦夫はいった。

峰子の表情は変わらない。

「絢ちゃん」

「ん」

話題をかえたい邦夫はいった。

「この週刊誌の夫婦を見習って、チャプの尋ね人、おっと尋ね猫か。その尋ね猫広告というやつを出したらどう」

「そんなあ」

と絢はいって、峰子をうかがうように見た。峰子は表情を動かさなかった。絢は少し甘えた調子でいった。

「うちはそんなお金持じゃないわよねえ。ママ」

「当り前でしょ。莫迦莫迦しい」